松浦記集成

卷ノ五

國費
文書係
第　號
年　月　日受入

48583
0791
15縣
16=4
S219
D

松浦集成巻之五

目録

名古屋城
同作事備之次第
唐津城往営
寺沢家奥殿之次第

図045

七項目…願ヒマス…願ヒマス

一、圖書ハ丁寧ニ取扱ヲ……
二、書中ノ紙ヲ折ラヌ樣……
三、指先ニ唾ヲ付ケテ頁ヲ送ラヌ樣……
四、鉛筆ニテ書入レヌ樣……
五、鉛筆等ニテ刊サヌ樣……
六、大キナ圖書ヲ片手ニ持ッテ讀マヌ樣……
七、圖書ヲ又貸セヌ樣……

48583
0791
15縣
16=4

名護屋城

尾張国愛知郡中村渙夫秀吉を生（俗説渙夫智助日吉權現に祈誓して男子を儲く其面容猿面に似たり故に幼名を猿之助と名づ其賢才智衆人に勝る常に武備を心掛け児戯にも城郭を築き戰場の理を究め其指揮氏子の事衆人の及ばざる所あり武家に奉公して主人の意を受け従ふかさ抽んでたる者なり）其姓名木下藤吉郎秀吉と云織田内大臣信長に仕ふ天正二甲戌年秀吉を筑前守に任じ氏を羽柴と改賜ふ同五丁丑年十月秀吉に播州を賜ハり領せしむ同九辛巳年正月播磨国姫路城を築く同十壬午年六月二日信長其臣明智光秀が為に京都本能寺に於て自害す是信長本願寺と戰爭の年ハ也此時秀吉中国毛利輝元と戰爭有り秀吉明智が謀逆を聞て毛利に和をなして直に軍勢を引卒して明智を討ち主君信長の仇を

報を去る年五月秀吉大坂城に移り後也其後秀吉将軍職の勅を蒙り
大坂城に居住せら者同十三乙酉秀吉関白に任じ姓を豊臣と改
め賜ふ同十五丁亥年秀吉聚洛の城を築き九州を定む同
十六戊子年洛陽の大佛を唐金にて鑄る同十月秀吉北野茶湯
の大會を催す別記有り同十七己丑年淀の城成る天正十八
庚寅年七月朝鮮の官使来朝を使節黄允吉金誠一許筬之
右八是迄我国へ来朝せる事古より絶る事なりしに足
利義政の時應仁の頃より其沙汰なく打續ける兵乱に其
事廢れはる故秀吉我日本国中を鎮定ぬひ去る天正十四年
橘康廣を使として朝鮮へ遣し彼国よりも通信使を来ら
しめて隣国互に好を察くせんと申送り給ひしに海路
の波濤事故障なきをるを答へる敢て使節を送らは依之秀
吉重て宗對馬守吉智を以て當寅年二度朝鮮国に遣はき
る朝鮮王李昭辞する事能ハを次度三使をして来朝せし
む秀吉折節相州小田原北条家鎮め出陣の砌りにて軍務
の暇なきゆえつて同十九辛卯三月迄京都に滞留せし處
同月御目見へ在之然るに太閤より書翰を朝鮮へ送答せ
らるゝ文中に我日本の如き小国ゆえを治めて日城費さ
ん事大丈夫の志にあらは依て大明国に入て皇帝為らん
と欲る時に望ては朝鮮ヨリ以て先鋒為ら志めんと認め三人
之使節に渡さる三使拝して本国へ帰る斯て秀吉関白職
を御養子秀次に御譲り秀吉を太閤と稱する也同年秋朝
鮮征伐決定有りて来る辰年正月先陣に肇京々渡海之場所に
出会二月三月に至り京八次第を守りて渡海をべし大閤

八肥前国松浦郡名古屋に陣を据ゑ軍旅の御指揮有ル
へと名古屋御城普請等其手當さ場さ勇猛の事共也
聞きバ天正廿年改元有て文禄元年と成ル太閤御下知の
如く正月中旬諸国の軍勢京都に集り軍船の通り名古屋
に出勢せり翌同年三月十日大閤聚樂城を立せられ名
古屋に御下向有り同四月朔日渡海ス軍勢十四万人名古
屋を出船ス小西摂津守行長逆浪をおぎ四月十二日朝
鮮之釜山海に着岸一直に其地の一城を攻落せり其餘ミ
軍勢追々着岸せり夫より加藤清正小西行長ミ二手先陣
に進ミ加藤ハ北道へ向ひ小西ハ王城へ向ふ国王西王子
都を捨て逃去ル五月廿日正が手に生捕ル其後大明国より朝鮮に加勢ス
を差向ル依之日本の諸諸将大に驚き名古屋城へ注進して
救の勢を求む大閤此事を聞加勢として信田長盛石田三
成其餘大将十二人軍勢七万人秋七月に渡海ス同月大閤
の母君也を辞せらるゝに依て朝鮮の指揮を前田宰相利
家と徳川家康公に任せて大閤ハ名古屋を立て上京せら
る其後同九月に再ビ名古屋へ下向有り御供ハ毛利宰相
秀元也九月廿八日に赤馬関に達て暫風に逆ひ同晦日漸御
船を名古屋に着岸せらる斯くて朝鮮国ハ大明の加
勢其将祖承訓小西行長に打破られ軍兵を失ひ逃帰りし
ハ大明王神宗皇帝大に怒り再び李如松を大将軍として
司馬石屋を以て是を助け朝鮮を救ハしむ爰に大明の都下
に沈惟敬と云下賤の者在り定き宿産業もなく大酒を好

ミ博変ニ荒シ古今無類の溢也者なりしか能人真似をし
たる故日本の言葉を學ひ得て何卒此節の乱を静めんと
存ぜ此京の都ニ越此度し大將軍司馬石屋ニ訴へたるハ
先ニ祖兼訓日本勢ニ破られ逃しハ全く日本の人情ニ通せ
ぬ戰ひのを情を知ずるに依て也某若年より數度日本
へ渡海して彼国の人情能く存じ度へバ某を以て一將為
らしめ給ハゞ只一撃ニ日本勢を破り本国へ追逐さん事
何の子細も無ハ、ぞと手ニ取るやうに申しなきハ石生日
海ゆる計課て有りや惟敬答へなるハ某今日本の戰將
小西行長ニ逢て偽て和睦を乞べし其隙ニ軍兵世余万
人を催し彼を備への怠り討んの隙ぞと云事なるべら
ら此石生手を拍て大ニ悦び此謀て極めて妙也成就の上
ハ恙聞して厚く恩賞有べしと云惟敬頂掌して日本の諸
將ニ賄賂を贈きあめ金銀を持参し其身ハ麻衣玉帯を着
て人臣容貌大臣のかく出立自ら遊撃將軍沈惟敬と改め
一時の富貴人の目を驚らし冬十月朝鮮国へ下向此時
小西行長ハ朝鮮王李昆を追落し平壤城ニ楯ヲ籠り居る
りしに日本の加勢ハ渡海して益々軍威を輝し居る處
へ沈惟敬来りて和を求むに依て諸將評議區々止矣ニ日本
とり再加勢とし渡海せし石田治部少輔三成兼て大志
有りて太閤ニ諂諛と專ら我身の出世を願ひ居る者ハ
らるまぬ大閤も九州の探題為らし免んと嘗て内意も有
ひきハ此時太閤秀大志の手始めと存居ゝまハ專ら大閤
の御氣ニ叶ふやうニ朝夕こひ願つらゝを求らとしなり

然るに斯く朝鮮の軍事繁多なるハ若や御壽命にも障りて
ハ叶ふまじきまハ此度の軍事何卒和睦をなし大閤の壽
きも延長やうふと兼ねて存居なる折なるハ惟敬か来り説
くを幸ひに小西に向ひ何卒和義調ふ様にと頻りに進む
且行長ハ淀君の寵愛の大名なれハ淀君も和義調ふ様にと
御傳言有りしを只管偽り申すにより行長も止事なく
三成ら雑説に迷ハされハ和睦の義も領掌して三成行長惟
敬三人にて密事を談し日本より七ヶ条の難問を申らけ
五十日を限りの約束にて惟敬領掌して退出を斯て大明
国にハ大將軍李如松頻りに軍勢を催促せしいへとも近
来北狄侵犯し所々の軍に兵を分ち遣はすよりむ〳〵
數集来る勢もなく漸十二月上旬十五万人の軍兵を調へ猶

是にても不足なり迚漢朝より三万人の勢を借り朝鮮の
軍兵を合せ餘力李如松是を引率し同月廿五日朝鮮に入る
日本勢ハ惟敬か音信を待ども露斗りの便りも聞く事や
約束の五十日も過て十二月の末惟敬より使を以て大明
皇帝和睦の事許容し給ひ近日惟敬自ら日本へ渡海せ
しと申送りしを故小西右衛門等大に悦ひ僧玄蘇に返書を
かいせ使を返せ文禄二癸巳正月日本の諸將評定ありし
るハ惟敬義を斗るといへとも人心の反覆斗り難き
ハ和睦調ふ迄ハ軍令怠らぬ様申合せ寄ら堅固に籠城の
りしる然るに明の大將軍李如松ハ十餘万人の軍兵を率
一正月五日平壤城に押寄て嚴敷攻寄戰ひしを城中大軍
を防き兼行長三成等同六日の夜王城さして迚走る明兵

斯とも知らざる夜明けまで城を攻ぶき共人壹人も無りし
に寄り直に王城さして押寄る日本の諸大將加藤清正鍋島
直茂之外ハ不殘王城に在りける故大軍を以て戰ふべしと
軍配在り正月廿六日明兵と大に戰ひ日明兵利あらに
して李如松迯走る双加藤鍋島ハ朝鮮北道に深く攻入り
其内清正ノ一手ハランカイ迄攻入る此時朝鮮八道の
内五道ハ攻破られ殘る三道も甚危し然き共大明より
追々救の兵出来るにより朝鮮人又勢ひを直し新黨蜂の
如く起り王城より釜山浦の往来も自由ならに兵粮乏し
にきハ斯の如くにて日を送らむ大閤の御怒りを受けんも
難義なられ注進して救を求むへしと諸將評議一次有清
正直我も次時王城にかへる否や三成沃を流し中に書い

次趣上聞に達し為り共再ひ救ひ差向らるゝ軍勢なく徒
らに大閤の御心を苦しめ奉るのみ也某か存念を以て是
を斗るに大明と和睦して日本へ帰陣するより上計有る
歟ら見て申す深田秀家大に怒り先に沈惟敬来て和義
を斗るか為に味方欺きて平壤の敗軍に及べり然るに今
日本より和を求めんハ大閤の御恥辱也と申なる三成云
く先に惟敬ゝ条の難題を承り大明是を受けハ和睦也
へし若し諾せざんハ兵を撃て討べしと約せり其一面国
の和親代々変ぜず間敷事第二日本の攻取りし地を永く領
ぶべき事第三朝鮮より日本へ貢を入る為き事第四大閤
をして大明王と成ぶき事其外三ヶ条ハ国家の秘ける
事なれハ顕して云おゝ如是なれ時ハ大閤の御望ミ既

に足まり何を我朝の恥辱なんや伐之行長か再書を惟敬に送ふべ日本の武威に恐き大明朝鮮悦んで再び和義に及ふべしと云加藤清正ノ曰七ヶ条を内大閣を明の大王にせんと言事如何なる悪人ふり共何ぞ是を家知せざき国恥り身死ぬらむじらばせん自ら朝国の帝王にしてと云ハ実国の人を明国の帝王ならん志免ハ狂人なるハいさ知らず人心有らん者肯ふべき謂きなしと云三成笑て曰貴殿の仰の如しといへとも人の心の同しからさるハ其面の実なるが如しとやや明帝如何なる所存有りて大閣秀明王に封ぜしきにもなら事なるハ再び会戦に及んに子細有まじ先つ惟敬に書を贈り彼ら答へを聞せ場へと諸大将も異国の長陣に倦み労れ只和睦に志らしと云に

寄り一同三成か言葉に隨い書を認め贈りける此時明の大将軍李如松ハ平壌城に在りなるが小西行長か書を得て大に悦び惟敬をまねき和義を調とし也惟敬軍速王城に来りて対面し此沈惟敬素性無頼の輩人なるか行長亦正直の武士になら共三成ハ恐れ強き侍者なるに是等と三人密談をなし如何成謀事なら施ん七ヶ条の趣悉く明の朝庭許容なりて朝鮮の二王子を返し王城の軍兵を釜山浦へ退ハ李如松も大軍を引て明国に帰るべしと盟約既に極りなき共二王子を返す事ハ大閣へ祈がハ也んハ叶まじと此一事に限り皆ハ王城の軍勢を退ハ最も易し世王城を焼拂ふて釜山浦迄退きけり斯て大明の官使日本に渡海して和睦の盟約かなく調て後西王子を

48583

返せへ―と惟敬を元へ遣―れば李如松も下知と―て沈惟敬徐一貫謝用梓次三人を以て日本に渡海せしむ秀吉甚々悦び賜ひ三人の官使を名古屋の旅館に伴ひ入き前田宰相淺野弾正に仰せて饗應させられ斯て三使に御返書を遣され帰り賜ふ且内藤飛弾守を以て朝鮮在陣の諸大將に仰て和義盟約調ふにおゐては両王子を返せへ―と御下知りはるに依て小西石田等清正が両王子を生捕―高名を祝さと明国の音信を聞き―て両王子及び生捕を不残返―はゞ明帝に日本勢退き―ハ全く惟敬の働也迚恩賞加へらるべしと大明より返報ふく大閤も和義偽りならん事を怒られ晋州城を攻落せと下知せらるゝにより日本勢又々晋州城を攻落せ

次時李如松ハ王城に在りて是を聞惟敬を呼て大に怒り汝日本に行て和睦成調ふべ―と申せに寄明帝より賞禄を賜り其身ハ富貴を得名れとも日本勢いまだ本国へ返らに乗へ晋州城を攻落―多り汝々罪萬死に當りと云惟敬大に迷惑―急き釜山海に至り小西に逢ひ約束に違ひ晋州を攻落―多る事を恨む行長又惟敬を罵り汝ち我前かゝる和義の事を談ずるといへ共悉く實なき事也誠に和睦調ふハ明兵国に帰る為きに未々王城に屯―て動りに我近日大軍を起―再ひ王城を踏破らん急き帰りて次首を告よと云惟敬次言を承り又立帰りて李如松に小西ら怒りの趣物語り先ハ兵を納め明国へ帰り賜へと云れハ李如松ハ天子の命を受け日本勢を退るべ出勢

せ一事なれハ何そ兵をまぢえ引退んやと云美ニおゐて
惟敬始て突じ身ニ及ひ如何ともべきと案一煩しきるう急
度計を按一付使を以て司一馬一右一星へ事の次第を詳ニ申一
遣一たるか否一生元来惟敬と睦敷ありしハさ柄〳〵に
事をこ一ら へ奉加松ら軍をかへすべき旨教命あるやう
に奏聞一ゆる間其旨ニ任せちきはる依て奉加松兵をま
ど免明国へ退きゆる後に於て惟敬弥和睦の事を取行ひ
小西行長ら姪飛彈守行政をそもなひ日本関白秀吉大明
の朝廷へ降参ゆるから小西飛彈守相謀をもと披露一
大明国へ伴ひ参りゆる是惟敬と小西右田の茲人ら工をこ一
らへゆる偽りかて日本へハ大閤を明帝と稱せんと欺き
大明へハ秀吉降参ゆるとたゞ一り只和睦の成就せん事の

ミを斗りゆる斯て月日かさなれ共大明の返報ハおそ一然
ルに十二月大坂城ニて淀君ら御腹ニ男子を出生一給へ
り果を秀頼と稱ゆ依之太閤大ニ悦び賜じ名古屋の軍事
ハ前田宰相徳川大納言ニ任せらゆ大坂へ登り賜へり時
ニ朝鮮の釜山浦へ小西飛彈守が音信閣へ司一馬一右一生惟敬
等事を計り明の官使と共に朝鮮の三一浪一江地迄出ゆる由
聞へなれハ和睦の事相違あるまじと十二月の末太閤の
御下知として朝鮮出陣の諸大将其半を召返さゆる加藤清
正始大将八人軍兵八万人也
文禄三甲午年太閤伏見城築成ル二月中旬太閤吉野花見
遊歴あり三月三日大閤高野山ニ詣てらゆ其後秀次悪逆
有り賊徒石川五右工門等ら刑罰有り朝鮮和義未調也

同四年未年大明より和平の使節日本へ来る本使李宗誠副使楊方亨并沈惟敬ヲ差添去年ゟ朝鮮ゟ三浦江北へ止り日本勢の帰国せるやと伺ひきとも日本勢厳敷砦をかま〻防禦の備一堅固にして退べき色も見へされハ大明朝鮮の官人さ皆〻評定して所詮日本人の疑を解ク為にハ李宗誠等の三人の使節を釜山浦ゟ至らしめ和平の義を急ぐべきハ勿論なれとも猶しも次時小西行長太閤に謁せんと日本へ帰り何事の義論にも不及次年も空敷暮にハ

慶長元丙申年次年丁酉禄ハ改元有りて慶長元と成次春行長再び釜山浦に至りなれハ大明の両使及び沈惟敬等も不日に日本に渡海せへしと其用意とり〻也本使明の李宗誠と云ふ者年若〻といへとも貴族の裔なるハ明帝ゟ正使の命を蒙り其威勢尤強く且富貴ゟ諸侯なれハ車馬に乗り付隨ふ歩卒華美を盡し誠に次度日本渡海官使等一ゟ人と八見へにはり惟敬密に是を嫉し次度大明日本和義の事に於ては皆悉く我方ゟ出せとも小事ゟ

ゟし彼ノ李宗誠如き貴口ゟ小児ゟ指揮を義ゟ事口惜しれきと日比恨に居ゟりしゟ一つの謀計を案出し宗對馬守ゟ味内ゟ士卒に申合め李宗誠に言ハせはゟハ日本国惣領太閤秀吉ハ元来大明朝鮮と和睦の心なしとい〻へとも次度偽て卿等を日本へ入き人質となし長く若しこと受けさせん謀斗也と誠しやかに言ハせはれハ李宗誠大に驚き或ハ恐れ或ハ嘆き如何せんと心を苦しめ

ムるが堪へかねくや思ひはん天子が賜りはる勅書及び
使節の印府其外荷物を打捨置夜半に紛れて遁れ出明国
の都をさして逃帰りは斯の如き騒動により急に渡海
せん事もなりがたくいつしか其年の春も暮れ夏の末に
成こなり此時太閤伏見の城に居らせはるが七月三日大
地震して洛中洛外社頭寺院民屋其外所々山崩き氷湧き
出賢に大騒動也斯て其八月明の楊方亨を正使として沈
惟敬を副使とし朝鮮国かハ黄慎(ヨウシン)朴弘長(ボクコウチヤウ)の両人を差添
堺の津に着船して小西行長始め日本の諸将不残帰国し警
固をなして同廿九日伏見に至る太閤の命を受て毛利豊前
守饗應の役をなしぬ朝鮮の両使対面の上太閤仰せるハ
次度和親の事朝鮮国を憐むが故なり況や両金子を送り

いろハ格別の仁慈なれハ国王李昭(リエン)自ら来朝して恩を謝
せ為き處陪臣を以て使せしむる条不埒の至りなと責ち
れけれハ両使恐き入こと小西行長登城して頂
取なりけれ共太閤の心解けられを又九月二日明使斗り
を伏見の城に招かれ御対面有り明使金印献物をさゝけ
る其日ハ暮て同三日御酒宴饗應さ侍へ也同四日大
明の聖書を讀しむべしと竹鶏禅師を召されるに然るに
石田三成禅師に密に頼ミるハ大明の素書を讀ミ賜ハ
ゞ文中に誇ゝる詞あらん故能きよふに縮ひ讀ミ賜へ有
の儘に讀賜ハゞ太閤怒り殺りて再ひ大乱に及べしと云
に寄禅師も四海無事なるにたゞしと石田が意に隨ひ兼
知てありは其處太閤御心替りて相国寺永哲禅師に讀

せよと早速召れる然ル處へ南禪寺の靈三和尚不斗登城在りて故靈三に讀せよと御渡きる早や大小名不残登城在りて靈三命を受け奉書を讀め其文中に豊臣秀吉を封して日本の国王とはと云詞在り大閤聞て大に怒り両使をむこと白眼大明を封して日本王となさんとハ何事ぞや我自ら日本の王たり何ぞ大明の力をかりんやハ小西行長我に告て秀吉を大明の国王たらゝめんと云り是に依て大明朝鮮を許して軍をかへしたり行長元来大明に志を通じ我を欺くと見へたり早く引出して明の両使と共に首を刎ぶと怒らる依て諸大名さ為く現成に次上ハ又々御征伐有ルにもゝらじと申ハ夫にて御心やすして明使に給ふ御奉書在り朝鮮王も責る三ヶ条の第一ハ前年朝鮮国ハ渡海せし官人大明の事を隠して言上せざりし事第二沈惟敬等なるが ちゝ歎し故に両王ハ怒くゝ返しり然ルに速に来て恩を謝せず第三日本決明和義の儀に付朝鮮王並事表裏及覆の心を以て両国を惑ハし明使の渡海も遅々に及べり是等の事共詳をべらられに依て再び大軍を差向け鑾にせんと記されたり依て両国の使官いと恐れ急き朝鮮に帰り此書を国王に奉る国王大に驚き大明へ訴へ救の兵を求む是に依て明帝大に怒り沈惟敬が表裏の所為不埒也迚惟敬を獄に下せ慶長二丁酉年正月日本の諸大将一ト先帰国の上再び朝

鮮に渡海し次度は加藤清正一番に釜山浦に着岸し其餘の諸将追々着岸し朝鮮国大騒動となりぬ依之明帝より加勢として刑部を大将軍となし其勢十五万人を以て朝鮮を救ふ日本の諸将も追々太閤へ救を求む太閤ノ命に大明朝鮮我を殺さるは先に金羅忠清の二道を取らざるに依て也故上は清正行長廣を異国の土と成し忠戦を勵む所と頻に下知せらるる日本の戦将も太閤の意を恐れ日々丹情を抽て大に合戦を為せり黄石山南奈全羽等の城々陥入れ以九月の末大明の加勢船手の大将李舜臣朝鮮の加良島より龜甲船を以て日本の船手藤堂佐渡守鬼等の大軍を大に破る故所に波多三河守戦死是は人違ひ又は記者の誤歟三河守は文禄甲午春太閤の意に違ひ釜山浦より直に夫より加藤清正蔚山に籠て大に常陸築波に配流と成る考べし

明兵を破る其後朝鮮所々の戦場絶間なし（記に詳也 慶長之同三戊戌年三月太閤醍醐の花見催せらる夫より又名古屋へ出陣あ賞情有りしに其姑より疾に染せらる次第に其疾心病にして八月十八日終に薨去となりぬ壽六十三歳東山阿弥陀が峯に葬埋し禁廷より度々勅使を下し賜ふ社領一万石寄附有り然るに太閤生前に徳川公前田侯に秀頼成長迄天下の政道後見御頼有之両公御誓詞御血判を以御受合有之と記に見へあり依之太閤薨去之事両公の御情圖を以て石田三成浅野弾正を以九州に差下され名古屋に着岸夫より朝鮮に渡海し君の衆を披露せり諸軍一同愁傷言ん方なし直に朝鮮城々の軍兵を引拂諸将一同日本へ帰朝せり日本勢此次大衆を聞て取物も

取敢ず戰場を引き揚げ其始末調ひし事ハ亦し也
朝鮮二度の戰にて生捕の人數多人質として日本に在り
慶長十一丙午年朝鮮へ送り返しあるハ是也俘の名前不分
明也其事両公の御計ひにて同十二丁未年より朝鮮人來
聘せり

密に機に太閤の素性其始め尾張國熱田人の家に生れ其
質家に拙んで軍事に達し追々經上り天正十五年逆
臣明智光秀を討て主君の仇を報ひ其後將軍職を家継
て關白職に經登り慶長三戊戌迫の歳去迫十七ヶ年の
治世壽六十三歳也嗣君秀頼父禄二癸巳年四月九日誠
出慶長四己亥ノ両公の後見にて同八癸卯年二月内大
臣に任せられ元和元乙卯年大坂落城迫十七ヶ年の治
世壽廿三歳也御父子合三十四年也夫き太閤其功の大
なるや化ノ慈仁以來の乱世を鎮め日本國中を平定し其
上肥前国松浦郡名古屋城を築て陳營を張り朝鮮を征
伐し獨大明に志し有りて其軍事半にして歳去せらる
其一生の大望故名古屋城に終ル開闢以來我國の武將
雲文に多なるも其右に出ル人有る事を知らず然ルに
僅ら二代も經ずして其家系盡るハ何事ぞや所謂天運
猶環の遅速私に計り難し知る所にあらず嗚呼命哉

別記　御旅館御作事覆加左

○名護屋城

唐津ヨリ名護屋城江三里廿二町戌ノ方

一本丸　東西柔十六間　南北六十一間　戌亥角天守臺　臺斗城高サ十五間

数寄屋

本丸ヨリ山里ヘ乗ノ小門　長谷川宗仁法眼

書院座敷何茂花鳥山水狩野右京亮画ノ養盡し彩畫ス　寺西越後守

本丸ト二ノ丸ノ間北間ノ門

同大手門　河原長右エ門

同腐櫓　御牧勘兵衛

同取附二階矢倉　芝浦観音寺

同四間梁五間矢倉　同　人

本丸西ノ角櫓四間梁十間　羽柴美作守

大和中納言

同取附矢倉二間梁三間　同　人
山里丸東西百八十間南北五十間横廿間　石田　杢正
数寄屋　寺西　筑後守
木花ノ茶屋　太田　和泉守
書院五間梁六間
座敷不残狩野右京亮画　寺沢　志摩守
御臺所七間梁十六間
流間十間梁十一間
御座ノ間西五毋ノ襖右京亮是ヲ画　築山泉水
遣り水　木千年も経ル様ニ苔むしたり
同次ノ間　耕作ノ襖右京亮画ヲ
三間花鳥ノ襖　同人筆
上臺所六間梁四間
表御座ノ間　慈童ノ襖長谷川平蔵画
同次ノ間　山水ノ襖同人筆
同臺所九間梁十七間　石川　兵蔵
右取附料理ノ間
山里局六間梁十三間　石田　杢正
右間毎ノ花鳥ノ襖右京亮画
同局五間梁十五間　建部　壽得
同湯殿　仙石　權兵衛
同御藏六間梁十間　戸田　清左衛門
同御藏五間梁廿間　小西　出雲守
同取附櫓　御牧　勘兵衛

同国木作番所　　同　人
同国木作の門　　同　人
二階間　　仙石　左正
楽園　　同　人
一二之丸（東西平五間 南北五十九間）寅角
二階櫓四間梁五間　　潘口伯耆守
同天守の下冠門　　太田和泉守
同三階櫓九間梁十二間　　伊藤長門守
南ノ間三間梁七間櫓　　鎧侍従
同乾戌七間梁四方四間石垣　　同　人
大手三階鐘楼堂五間梁四間　　羽柴五郎左衛門
同東の櫓四間梁十間　　長束大蔵大夫
同北の櫓四間梁八間　　大和中納言
同西の方二階櫓四間梁十八間　　浅野弾正少弼
南取附矢倉三間梁八間　　同　人
大手櫓三間梁十三間　　鍋島伊平太
一三之丸（東西三十四間 南北六十二間）
同西方櫓二間梁三間　　羽柴河内守
同冠木門三間梁五間櫓　　羽柴左近
同西門三間梁五間
同西北矢倉四間梁五間
同取附二間梁四間
同大手東門四間梁七間櫓
一　滝撃曲輪（東西二十六間 南北二十四間）

一南方彈正曲輪 九十間ニ 四十間又八三十間

一水手曲輪 十五間四方

一山里曲輪ゟ間数ヶ所ゟ出ヘリ 次下腰曲輪小曲輪合十一曲輪也

一城の廻リ十五町

一城ヨリ出ロ五ツ

一城廻リ石垣但所々大方崩井戸皆潰迯水ナシ

一城山近辺松山在リ城山ヨリ皆低ク在陣ヶ所陣場ヶ跡在リ 別ニ出

丑寅ノ方ニ船着湊在リ城山ヨリ六丁余

右之古城本丸番所定番衆ニ侍番屋敷在リ

名古屋在陣之軍勢

壹万五千人	武藏大納言	壹万人	大和中納言
八千人	加賀宰相	三千人	河野津中将
千五百人	結城少将	千五百人	前尾張守
五千人	越後宰相	三千人	會津少将
二千人	常陸侍従	千五百人	伊達侍従
五百人	出羽侍従	八百人	松任侍従
八百人	八幡山京極侍従	百五十人	安房侍従
千人	羽柴北条	千五百人	館野侍従
六千人	会津美濃守	二千人	村上周防守
千三百人	溝口伯耆守	五百人	木浦宮内之輔
千三百人	水野下野守	千百人	青木紀伊守

五百人　宇津宮弥三郎　二百廿人　秋田太郎
百五十人　津軽右京亮　二百人　南部大膳大夫
百人　水多伊勢守　二百五人　那須太郎
七百人　真田源吾　三百人　桜木河内守
六百人　石田玄番允　三百人　日根織部正
二百人　北条美濃守　千人　仙石越前守
二百五十人　木下右衛門督　千人　伊藤長門守
合七万二千七百廿人

先備衆

六百五十人　冨田左近将監　八百人　金森飛弾守
百七十人　蜂谷太膳大夫　三百人　戸田武蔵守
三百五十人　奥山佐渡守　四百人　池田播中守

四百人　小出信濃守　五百人　津田長門守
八百人　山崎左馬允　二百人　上田佐太郎
二百人　赤松上総守　三百人　羽柴下総守
四百七十人　稲葉兵庫守　二百人　市橋下総守
合五千七百四十人

弓鉄炮衆

二百人　大島雲八　二百五十人　野村肥後守
百七十五人　木下吳右ヱ門　二百五人　伊藤弾吉
二百五十人　松平越五郎左衛門　百三十人　宮木藤左衛門
百人　鈴木孫三郎　百五十人　橋本伊賀守
二百五十人　生駒源助
合千七百五十五人

四千三百人　御傍衆六組
五百人　室町殿
千五百人　木下米助組
千二百人　御詰衆
千五百人　御仲間以下
合壹萬四千九百人

後備衆

三百人　羽柴三吉侍従
三百人　右田織部正
二百人　蒔田權之助
百三十人　生駒修理亮
百人　溝口大炊介

三千五百人　御小姓衆六組
八百人　御伽衆
七百五十人　御使番衆
八百五十人　鷹匠衆

五百人　長束大藏大夫
二百五十人　山崎右京進
百七十人　中御式部大夫
百人　生駒主殿頭
二百人　川尾肥後守

五十人　池田彌右衛門
百三十人　木下右京亮
二百人　有馬一万助
二百人　寺西筑後守
五百人　福原右馬之助
二百六十人　長谷忠兵衛
七十人　川勝右兵衛
百五十人　氏江内膳正
二百人　間宮彦太郎
合五千四百七十人

百廿人　大場與一郎
二百人　矢部豊後守
百六十人　寺沢志摩守
二百人　寺西治郎助
二百人　竹中丹後守
百人　松岡右京進
二百五十人　氏郷志摩守
二百人　服部土佐守

朝鮮国先懸衆

七千騎　小西摂津守
五千騎　對馬侍従

三千騎　松浦刑部卿法印
千騎　大村新八郎
合壹萬八千七百騎
八千騎　加藤主斗頭
八百騎　相良宮内少輔
合二万八百騎
六千騎　黒田甲斐守
合壹萬二千騎
一万騎　羽柴薩州侍従
千騎　島津九郎
合壹万四千騎　秋月三郎
五千騎　福島左門太夫
二千騎　有馬修理大夫
七百騎　五島若狭守
波多三河守
一万二千騎　鍋島加賀守
六千騎　羽柴豊後侍従
二千騎　毛利壹岐守
千騎　原書無名
四千騎　戸田民部少輔
七千二百騎　蜂須賀阿波守
五千五百騎　生駒雅楽守
合二万四千七百騎
三万騎　羽柴安藝宰相
千五百騎　久留米侍従
八百騎　高橋主膳正
合四万五千七百騎
朝鮮国都城出勢衆
一万騎　備前宰相
二千騎　石田治部少輔
九千騎　前野但馬守
合二万六千二百騎
三千騎　羽柴土佐侍従
一万騎　小早川侍従
二千五百騎　柳川侍従
九百騎　筑紫上野介
一万騎　増田右衛門尉
二千五百騎　大谷刑部少輔
二百騎　加藤遠江守
千騎

三千騎　浅野左京大夫
千五百騎　南條左兵衛督
四百騎　垣谷新五郎
五百騎　別所豊前守
八百騎　服部宋次郎
三百騎　竹中源助
三百五十騎　石川肥後守
合一万五千五百五十騎
八千騎　岐阜少将
五千騎　羽柴筑前侍従
千騎　小牧太郎殿之外
四名長谷川藤五郎
東郡侍従

千騎　宮城兵部少輔
八百五十騎　木下備中守
八百騎　蒲生左兵衛尉
三千騎　中村右衛門太輔
千四百騎　都筑侍従
四百騎　一柳左近少将
四百五十騎　谷出羽守
三千五百騎　後秀次　羽柴内侍従
細川越中守
七百騎　木村常陸介
牧野兵太夫

五百騎　岡本上野守
二百騎　片桐東市正
三百騎　高山豊後守
百騎　太田小源太
三百騎　新庄新五郎
三百騎　毛利兵部正
合二萬五千四百七十騎
千五百騎　九鬼大隅守
千五百騎　脇坂中務少輔
七百騎　八島兄弟
六百五十騎　松浦備三郎
合七千六百騎者船手軍勢

二百騎　相谷内膳正
二百騎　片桐且元膳正
二百騎　藤堂和泉守
二百騎　三河正
二百騎　寺田兵部少輔
二百五十騎　早川主馬頭
千騎　亀井武蔵守
二千騎　藤堂仁右衛門
千騎　加藤左馬之助
二百五十騎　福島左衛門大夫

総合屋在陳軍勢合　拾萬五百八十五人

朝鮮国渡海軍勢合　七萬四千八百五人

都合拾七萬五千四百五人

一朝鮮国迎撃の軍船東国筋陸より南海西国九州北国秋田
坂田に国迎海在国其高拾萬在小大船二艘宛并水主之事
浦々家百軒小に人宛城納き高拾萬石小大船三艘に船五
艘船頭に見斗次第給米可定し事水主一人に付城持米拾
石持定也妻子扶持米可宛拾別事陳中小者に間已下の女扶
持米に其宿々に宛行小姓

総合屋城衆書　在陳

大和中納言　伊藤長門守　南部彌五八

毛利阿波少輔　伊藤彌五　佐久間河内守

森右近太夫　佐野源助　水野久左門

藤堂佐渡守　伊賀守　滝川豊前守

伊賀　侍従　仙石權兵衛　佐藤駿河守

浅野弾正少弼　河原長左門　鈴木孫三郎

浅野内匠侍従　石川宮内守　大塚喜一郎

同子息右京太夫　羽柴河内守　鍋島伊平太

播磨守　吉田久左衛門　落合藤左門

同合筆　日根野織部正　鈴木孫一郎

木下宮内少輔　伏屋小兵衛尉　蜂谷三左衛門

朽木河内守　同能弾正守　安藤治左門

小川佐渡守　西川八左門　吉田水主正

水野和泉守

石川兵蔵

関東衆

江戸大納言　家康公　秋田太郎

會津　侍従　佐野大輔

小笠川治部少輔　結城少将

伊達　侍従　政宗　滝沢又五郎

佐竹越後宰相　戸田安房守

出羽　侍従　蒲生忠郎

六郷衆

宇津宮弥三郎

田目衆

成田下総守　那須安房守

北国衆

北半助

佐竹　侍従

小野寺孫十郎

北条氏濃守

三屋伊勢守

直田孫三郎

里見　侍従

羽柴加賀侍従

羽柴久太郎

溝口伯耆守

上杉越後宰相

羽柴筑後守

村上周防守

羽柴松任侍従

青木紀伊守

東門番衆

一番　有馬中務卿法印

二番　太田和泉守　大林太甚之丞　石田左正

三番　長束大蔵大夫

四番　寺沢志摩守　芦浦観音寺御牧勘兵衛

西北前衆

七百人　冨田左近将監　八百人　金森飛彈守

二百人　蜂谷大膳太夫　三百人　戸田武蔵守

三百五十人　奥山田出羽守　四百人　池田備中守

四百人　小出信濃守
二百人　上田主水正
五百人　稲葉矢庫頭
二百人　市橋下総守
三百人　羽柴下野守

東ニ九後備衆

三百人　羽柴三吉侍従
百五十人　古田織部正
二百人　蒔田權之助
百七十人　中江式部太夫
百人　溝口大炊之介
五十人　池田孫右エ門

五百人　池田長門守
八百人　山寄右馬亮
二百人　間島彦太郎
一百人　赤松上総守

百五十人　木下左京亮
百人　矢部豊後守
二百人　有馬玄馬允
百七十人　寺沢志摩守
四百人　寺西筑後守　同治郎助
五百人　稲葉右馬之介
二百人　竹中丹後守
二百七十人　長谷川兵忠エ
百人　松岡右京之進
二百七十人　河勝忠兵エ
百五十人　氏家内膳正
二百五十人　氏家志摩守
百五十人　服部土佐守
二百人　寺西勝兵衛

右人数一日一夜勤番交代

一番　服部土佐守　木九裏門番
二番　堀屋駿河守　建部壽得　木九大手門番

壹番　中江武部太夫　貳番　山岸右京之亟
參番　石田　李正　四番　長谷川右兵衛尉
五番　石川備前守　六番　寺沢志摩守
七番　長束大蔵大夫　八番　眼部太佐守
九番　蒔田權之助　九番　福原右馬之助

右人数一日一夜勤番交代

三ノ丸番　兼亘　運組

一番　石川紀伊守　玉橋左近將監　佐藤半助
金森摂部助　田丸庄八郎　今枝庄七郎
片岡喜藤治　中村長介　雲村院忠介
滝川助太郎　李村三平　坂井理左衛門
水埜源左衛門　水谷作右衛門　坂井彦九郎

丹羽源太夫　落合新三郎　頑田源治
山中五郎作　土肥久作　上田勝五郎
宮村清三郎　平井金十郎　館埜源十郎

二番　中島佐兵衛組

青山勝太郎　齋藤新吾　佐藤半助
村上太郎兵衛　坂井平八　長谷川宗十郎
小沢喜八郎　菜原牧介　吉田彦四郎
芳根弥三右衛門　池山新八郎　宇埜傳十郎
水原彦三郎　矢埜十左衛門　塩屋宗治郎
長坂三十郎　郡十右衛門　吉田源十郎
薄田傳右衛門　河原庄兵衛

三番　長束治郎兵衛組

岸　久七

木下小治郎　坂井不三郎
池田　新八　一柳　大六
荒座三右エ門　岡村数馬之丞
見田小十郎　矢埜　源六
黄瀬嘉兵衛　大谷治郎左エ門
長江藤十郎　山口三十郎
田中藤七郎　松浦治郎吉
安田左傳治　山田半三郎

四番　来原治右エ門組

枚茗藤治郎　本曽八郎太郎
村井治兵衛　津田掃部之丞
河田九郎右エ門　平埜新八郎
薄田源太郎
河添治部之丞
安見甚七
山谷市郎
山羽虎蔵
五十森八平治
塚猪左エ門
田中三十郎
多羅尾久左郎
平埜九郎左エ門
生熊丹左エ門

越路又十郎
田川長次
大蔵五郎左エ門

五番　中原平右エ門組

多賀長兵衛
小出孫七郎
吉田九一郎
小寄兵右エ門
安宅源八郎
加藤小助
六番　堀田圓書俊組
上條武部太夫
前田太郎次
岡本清蔵
平右
松原兵衛
荒川助八郎
石川長助
石尾兵衛
矢埜九郎治郎
吉田文七郎
桂原兵七郎
伊知地与郎
森權九郎
渡江傳三郎
吉田三左エ門
小原長七郎
山紀勝七
俵久間義助
村瀬宗七郎
加藤清左エ門

然語久三郎　山田平兵衛
大山勝兵衛　伊藤　半八
東山市蔵　大津久兵衛
林猪之助　佐野吉三郎
矢林久三郎　園甚左衛門
栗屋藤四郎

一番　本多肥前守組　馬廻り組
伊藤丹後守
津田左兵衛　東原左八郎
太金又左衛門　長坂弥左衛門
村上勘物　岡村猪左衛門
藤堂勝右衛門　福原太左衛門
吹田宅右衛門
那次助左衛門
三上大造

酒井助之丞　小栗重助兵衛
岡田勝五郎　尾関喜久
清水猪左衛門　竹内虎助
吉田治兵衛　吉田九郎左衛門
松井新次　桑田孫五左衛門

村上兵部之丞

二番　河合九兵衛組
三孫好九郎　森宗兵衛
三好新左衛門　佐野若狭守
佐々喜藤次　佐野孫助
飯沼左右衛門　跡部左衛門
河合治左衛門　寺西半左衛門

吉田　疫山
三吉太左衛門　津田新左衛門
高橋孫三郎　山田　藤蔵
三好　為蔵
石川忠左衛門　稲葉半左衛門
高橋甚五左衛門　相谷與八郎

伊藤七蔵　樊瀬宇右衛門
三宅善兵衛　溝口新介
林助十郎　林長治郎
三番　真野蔵人組
赤松治郎太郎　津田小平治
小鳥新四郎　堀田三左衛門
堀田郡助　平秀作
塚本新右衛門　堀田權八郎
本村藤助　川地井三郎
平塚因幡守　乾秀九郎
貝塚五兵衛　樽本六兵衛
平野鬼助

林喜藤太
生駒左平郎
赤松伊豆守
太田平蔵
櫻本新六
佐々權左衛門
清水義右衛門
今井兵部之丞
真野右太郎

四番　佐藤隠岐守組
井藤兵庫頭　長谷川甚兵衛
竹腰三郎左衛門　大屋三右衛門
赤座彌六郎　上野中務少輔
安部仙三郎　河合書助
寺町宗左衛門　大屋助三郎
川村彦蔵　佐藤助治郎
橋本五左衛門　古田宗四郎
古田宗五郎　安見新五郎
寺町孫四郎　佐藤孫六
赤部長助

小笠原左京太夫
福田平兵衛
飯沼金蔵
同仁右衛門
青木善左衛門
金田孫三郎
寺町新助
飯尾兵右衛門
船津九郎右衛門

五番　尼子三郎左衛門組

春日九兵衛　東條紀伊守　中村掃部之丞
高橋三右エ門　進藤新四郎　采女孫左門
山岡修理亮　上田甚右エ門　三好助兵衛
井上　新助　梅原傳左門　川尻治郎左門
田邊小傳次　野間久左エ門　青木左京之進
渡邊九郎左門　河毛源三郎　岳村與八郎
松田源兵衛　水原又之進　河添源治郎
野間長次郎　田邊與左門　河毛勝次郎
伊藤半左エ門　齋藤吉兵衛　荒木助左門
六番　速水甲斐守組　加藤伊平太
佐々孫太郎　白樫主馬之助　白樫三郎左門
山中又左エ門　渡辺半左エ門　本郷勝左門

小坂　助六　千秋又三郎　夫間甚次郎
北村左エ門　数田伊賀守　森藤右エ門
佐々十左エ門　篠原又十郎　笠野左太夫
森村左エ門　佐々喜三郎　山内　善助
山本太郎左門　宮寄半四郎　青山　助六
竹内　孫助　南見　權助　戚井傳左門
北村　土助　鈴村與三左門
右之人数一日一夜勤番交代七月廿二日朱印御下定規大
坂ゟ一里小飛脚二人拘之上方用事早速可辨之事
文禄元年壬辰三月朔日先陣小西摂津守加藤主斗頭進發其
余ハ軍勢毎日到着同六月日
将軍京都進發同四月上旬名古屋着陣同四月十一日渡海

九軍勢名古屋出船同廿八日釜山海ゟ津着岸也此外八諸
軍鑑ゟ出書ニ略之

或人古城の詠

衣ゝ実に人乃国おもふ〻ものし哉
ゆ〻しく〻そ〻ゝ城婦新墓乃塚

○秀吉公名古屋御在陣ゟ節定書渡多三河守へ立奉行ゟ
書面

定

一往還ゝ輩一宿木賃ゝ事壹人壹文馬壹疋貳文宛取ゝ宿を
借ゝ取ゝ事

一糖菓薪草履以下一切不出事

一町人百姓ニ對ゝ非分を掛申者可被聽訴事
右之条々違背者族有之ハ搦取可被加誅罪ゝ若見隱聞隱
ゝおゝ以後被聞召及得共其所ニゝ町人百姓可被加
成敗ゝ

文禄元年正月

○唐津城

寺澤家興廢之次第

寺沢志摩守唐津城を築きし事其起元文禄元壬辰秀吉公朝鮮征伐同三甲午春諸侯帰陣の時岸嶽城主波多三河守朝鮮国釜山海ゟ帰帆直に常陸国築波山の麓に配流の下知有之右同二月九日也其波多領八万三千世九石七升寺沢家へ被下岸嶽城一圓拝領と成れ田中の城に當時假城なり其後名護屋城も領内に中にて不用城郭櫓門扉等拝領にて是を毀ち取り唐津に城地を見立船送りて築ち

一町則唐津城也

一肥後国天草郡四万石に町寺沢氏加增の訳ハ慶長五庚子年濃州関ヶ原におゐて石田治部少輔其黨を集め

東照神君ハ謀叛ニ時寺沢氏神君の御味方ニ加り其働格
別ニ功分ニ付右天草四万石神領之被仰付也其上平戸大
村五島壱岐四国伊豫の内高家以上人寺沢氏共力ニ被仰
付威勢増々盛也又唐津城普請の事慶長七壬寅年より同
十三戊申年迄七年ニ成就也本丸を満島山と云天満島の地
續きの所也今の州口を瀉切りと云往古ハ今の本丸の西
を流れ松浦川より西の濱の續也是ニ依て二ノ丸内の産神
八鏡大明神也二ノ丸外ハ総唐津大明神の産子と云也

一寺沢氏の領分筑前怡土郡二万石ハ元黒田甲斐守領内也
筑前博多津元公料なりしを黒田氏の願ニ依て怡土二万
石を替地として博多を筑前領とせらる其時薩摩山水郡
二万石唐津領ニ添地有りしを右怡土二万石ニ引替を被
願怡土二万石唐津領と成りし也

一鬼子嶽城の口領を唐津寺沢氏再検地元和二丙辰年也

一寺沢志摩守浅野氏口領を秀吉公の拝領慶長三戊戌年也
大かい世八年目寛永二乙丑年志摩守廣高隠居次男兵庫頭
忠高家督同十癸酉年四月十一日志摩逝去唐津入部の三
十六年目也寺沢氏唐津拝領文録四乙未同入部四年目慶
長三戊戌年也

廟所鏡村
諡曰 前志州大守休甫宗可大居士

知行高 唐津付八分二厘 増禄高 合十二万
三千石

一寺沢兵庫頭忠島家督寛永十一甲戌の正保四丁亥十一月
十八日逝去也家督が十四年目也干時寛永十四丁丑年肥

前国島原肥後国天草ニテ切支丹邪宗門一揆起リ同十五
戊寅年二月
将軍家光公命令ニ依テ諸将是ヲ攻一揆ノ籠城ヲ焼賊徒
三万七千人ヲ誅戮セ其節忠高江戸在府右一揆唐津領内
天草郡ニ懸リ〻ル訳ヲ以天草四万石御取場ニ相成唐津
附八万三千石ト成リ諸浪人共天草百姓ヲ集一揆籠城ー
切支丹ヲ行ふ天草富岡城ハ寛永丁丑ノ冬陣也島原領有
馬ノ陣ハ翌戊寅春陣也次一乱ニ付兵庫頭不首尾ヲ蒙ル
御上使 松平伊豆守殿 太田備中守殿 豊前小倉ニ於テ 上意之趣被申渡
次ニ天草有馬兵乱出来候儀領主トシテ油断不届ニ付是ニ
依テ所領不残御取場有馬ノ領主松倉長門守同前ニ可被
仰付候天草富岡ノ城堅固ニ籠賊徒共大勢討ヲ〻天草中
追拂候段ニ忠召依之唐津領悉ク郡共ニ八万石三千石新
地被宛行候共力大名是又取立候者也兵庫頭忠高家督寛
永二丁丑年ノ正保三丙戌年迄二十二年也寺沢氏唐津拝
領文録四丁未ノ正保四年迄五十三年也
謹白 孤嶺院白室宋不大居士 正保四丁亥十一月十八日 廟所唐津 近松寺
兵庫頭次度天草兵乱御截許ニ依テ狂気ノ病鼓ー間ハ孤〻
逝去ト云時ニ嗣子無之寺沢氏断絶ト成ル
慶安元戊子唐津公料ト成
御上使 水谷伊勢守 中川主膳正

右島原領有馬唐津領天草両陣之次第

（島原郡島原領有馬浦原城　天草郡唐津領　富岡城）

抑元亀天正の頃北狄より切支丹宗門神国に渡来西戎の王子附随ふ其名伴天連入満耶穌などゝ西戎の名を宗門の祖として本朝流布しなる甲斐なくも我国武勇の将て稱せる人々も窮理の正学に疎ふして西戎の迷いさん既ふ神徳と斎も外域の方便て陷ん(ちゃ)んとする所為

東照神君の御代と成て厳敷御制禁の御沙汰有り乃其根葉を枯せり然るに寛永廿四丁丑年十月島原城主松倉長門守勝家の領内切支丹の一揆起り其發端の者共ふハ矢野松右衛門千束善左衛門大江源右衛門森宗意軒山善右衛門是等の者共、ハ元ト小西摂津守の浪人ふて高麗御島原の内深江と云在所に年暦を送りて在住し近隣の者共か進め込し天草ふ上津浦と云所ふ伴天連一人在ゆ家を天下の御禁法に依て異国に追放し給ふ次伴天連其時末鑑と号して一紙の書を残せ其手跡の内ふ何ふ年五とゝの暦数ふ嚴て日域に善導一人出生して習ハさ仏に書を能くし言さ仏に真意を悟らせと云事然し其時ならぬを尊ん時節到来と書さり是を考ふるに甘草甚兵衛ら男子四郎太夫少も遺ゆを是則大将の任備ハきりと思民一統是を信せり又左志来左エ門と云人でいうせの画像を所持して是を念せり切支丹の一揆忽ち蜂起して島原城へ乱入らんとしなる是に依て城内も固章騒き松倉長門守も江戸勤番の留主成ん故人数少くして隣国加藤ふ頼しふ鍋島細川の両侯も在江戸なきバ鍋島信濃守の留主居諫早豊前三千餘騎て出陣し同国新田の庄ゆ

陣を取る細川越中守忠利の聞主居志水伯耆守四千餘騎にて
同国川尻に陣を取る鎮西の御目附豊後国府内の住牧野傳蔵
林丹波守（注進に拠る）郷人共島原城に押寄しに城内の松
倉の鉄炮頭島橋彌治右衛門島畑治郎左衛門入江兵右衛門大
に働て討死す肥後国天草は肥前国唐津城主寺沢兵庫頭
忠高の領地なるに八冨岡の城代として三宅藤兵衛を入置
しかど藤兵衛ら吟味強く天草の大庄屋渡辺小左衛門も肥後
国宇土郡にて召捕へ近辺を乱妨しかれば三宅藤兵衛防くといへと
も手に及ひかねく唐津へ注進しかれば岡島治郎左エ門同七
郎左エ門澤木七郎兵衛原田伊豫坂四人を大将として千
五百騎にて出陣せ先ッ三宅藤兵衛を大将として林又右衛門
同小十郎　助左衛門大に働て討死す其外数本渡合戦に

寺沢方討死貳拾四人岡島原田小笠原澤木敗軍して木渡
に引入る又岡島七郎左衛門柳本五郎左衛門両人は冨岡の
城へ引退きれ共三宅藤兵衛佃八郎兵衛并河九兵衛青木甚
右衛門佐々小左衛門五人は必死に成て働きしかど忽ち敵貳拾餘
人突伏せ大勢を追ひ拂ひ猛勇目さましく敵を見へかり冨岡の
城に籠し者共岡島治郎左衛門同七郎左衛門原田伊豫
大竹嘉兵衛稲田平右衛門浅井十蔵三宅藤兵衛沢木七郎
兵衛島田十郎左衛門関善左衛門国枝清左衛門桑田彌五
左衛門小笠原齋宮介等郷人等数千人に渡り合数所大戦成
りしかど切支丹の奴つれ大勢討取退崩し望国に城を持る由
へ其後一揆共恐れて数城を責る事能はず又上使として板
倉内膳正石谷十蔵尊誕を差て下向せ寺沢松倉怒政に

川て鬱憤を散せんとの事成へしと其趣を申述松倉の居城ハ
着陣也豊後府内の御目附牧野傳蔵松平神三郎林丹波守
長崎の守護代馬場三郎左衛門島原城ハ着陣在り寺沢兵庫
頭松倉長門守両人共に所領の御人もの一揆ハ江戸表より御
暇を給ハり在所へ急きくる鍋島信濃守ハ江戸参勤かて嫡男
紀伊守元茂次男甲斐守直澄一万五千餘騎にて島原へ出陣在り
久留米城主有馬玄蕃允豊氏も在江戸故子息兵部大夫忠里ハ
千餘騎を引率高木城へ豊後守を柳川城主立花飛騨守茂政是も
在江戸故猶子右近大夫忠茂五千餘騎を引て島原へ出陣也肥後
国細川越中守忠利父子共ハ江戸在勤故家臣長岡佐渡有吉
頼母佐岡人一万餘騎引て島原へ出陣ハ天草の領主唐津城寺沢
兵庫頭ハ居城唐津へ帰城して在国勢を催促して家老追々

天草へ出陣しかれハ又残勢八百餘騎を引率し甘草表へ
出船ハ軍奉行として豊後府内の御目附牧野傳蔵松平勘
三郎林丹波守三人也細川越中守忠利の嫡男肥後守光利
生年十七才在江戸成しる御暇を願請被る日に繼ぎ十二
月六日甘草へ出陣なりしかしかて坂手ハ海ばかりて川尻の
津へ人数を引入れ也右軍奉行三人ハ島原へ出勢を望れ
ハ有馬の浦へ押渡り上使板倉内膳正石谷十蔵の勢に加る
板倉来郡有馬の浦原の城ハ古昔より名を得し古城殊更
要害堅固なれハとて一揆の大将指揮をなし二月朔日ハ
十日の中ハ普請して粮米萬事調へ入備を成せり猶更海
岸ハ厳風を立うる如く其嶮岨船を寄附き様もなく二方
ハ又岸壁高く峙ちて下ハ白浪漲きハ其要害堅固なる事

云ふ及ハて城ゟ惣廻り百町餘も有り一揆籠城ゟ人数惣計三万六千餘人也其城主將甘草四郎太夫判官時貞と号して本丸に楯籠り附隨ふ者共ハ芋塚志右衛門渡辺傳左エ門赤星主膳馬場休意會津宗印同右京毛利平左衛門林七左衛門松竹勘右衛門三宅治郎右衛門久田七郎右衛門荒村休沃町田玄之丞女十三人ハ籠城の老人衆とて一統業用して時貞ゟ軍慮ゟ相手也城中諸所持口ゟ大將ハ山田右衛門佐大浦四郎兵衛從卒二千余人本丸ゟ持口を堅めゟり二ノ丸ゟ首頭ハ千束善左衛門上総助右衛門同三平戸島綱右エ門御卒五千二百人を從へて堅めゟり二之丸ゟとり出を田寄刑部ゟ受持て御卒五百人ゟて堅めゟり三ノ丸ハ大江源右衛門津村吉藏堂崎對馬北有馬久右衛門二千五百人を引卒し持口を堅めゟり同出丸ゟハ有馬掃部五百余人ゟて固めゟり大江口ハ大矢野三左衛門持口ゟて椨山小濱千々輪口ゟ津上津浦村右五ゟ村ゟ者共一千四百人ゟて堅む江尻口ハ蓑村右兵衛木場作左衛門安徳木場ゟ両村ゟ者共六百余人にて堅む田原口ハ深江治右衛門五百人を引卒し堅めを成ル大矢野松右衛門山善左衛門両人ハ健民二千人を支配して所々持口危きを助く亟き加勢ゟ爲浮述ゟ備を成ス軍奉行ハ有江監物入道林意竹塚志右衛門松島半之丞布津村代右衛門甘草玄札以上五人也諸事評定人として村々ゟ惣代を撰出し二十三人評議聚て名付々り使番ハ池田清左衛門ハ津左衛門尉千々輪作左衛門番頭ハ四郎丹後守義安栖本右京ゟ進之時

是等を右老中と名付て重役として鉄鉋方惣大将ハ柳瀬筑右衛門慶子木右馬之助時枝隼人正旗頭に高田權八柳浦孫兵衛大手搦手惣大将ハ蜷川右京進森宗意軒夫々の役割を成して篭城し々り　扨又十二月廿日家の城討手し一番松倉長門守勝元を先手として鍋島紀伊守元茂同甲斐守直澄立花左近将監忠重有馬兵部太夫忠里　上使板倉石谷其外御目附何も出陣也時攻口を開き双方弓鉄鉄鎗鉄を合官軍の討手台命を首に戴き爰を せん途と戦ひ々るに一揆篭城の中に諸浪人の溢き者戦事にせしこき奴家集りて指揮を成す事故存外に手強き ハ覚悟の前也然るに今日手始の軍に寄手こ中立花家の討死に立花三右衛門十時吉兵五佐田清兵衛渡邊治良左衛門綾辺藤兵衛

車田三郎右衛門田久右衛門北野掃部是等を先として物頭諸士人数貳拾八人其外手負の侍六十九人也鍋島家の討死手負足軽夫々迄二百余人と聞き上使附の兵士貳拾八人有馬家及び先手松倉家の討死手負共惣計合て三百八十餘人と聞き然る所江戸表より極月廿九日御目代として松平伊豆守信綱戸田左門佐氏継下向の由未鱗到来せり干時寛永十五戊寅年正月朔日家の城惣攻の先手として有馬兵部大輔續て松倉長門守鍋島兄弟家の城へ押寄ち原城中より一千人斗押出して寄手鉄鉋を放り事頻りにして寄手容易に進こ難し一千餘人の寄手軍をらけて見へ々れ後陣の諸勢入替り面も劣らず攻め戦ふに城内る一揆共押出しこ人数一人も退ろき爰をせん途と戦

ふか討死も餘程なれ共一揆の心素より一致にして進む
に猛く其心必死にして寄手を恐れさる有様なり且又寄
手の討死其数を知らに平時上使板倉内膳正味方を見渡
し軍の勝利とかゝりしがらに大に怒り一揆むらの集り
者共何程の事ぞあらん一戰に打散らせ引なかゝれと勇
し進まれしに城中より味方を悔して打さる鉄鉋矢の急
所に當り忽ちあへなき最期遂ぶ石谷十藏松平神三郎
も手負ひて引退れり此時の討死手負有馬忠里の味内
三大頭物頭諸士の討死れ十余人手負の侍百七十五人雑
兵手負に至迄一千百余なり鍋島手の討死ハ頭物頭兵
士足軽迄三百八拾三人手負四百余人雑兵手負迄二千五
百餘人松倉長門守味方に討死の諸士十七人手負四十九
人雑兵討死手負迄三百廿七人松倉左近手の討死廿貳人
上使に附し兵士討死三千余人手負五十余人其日の討死
手負惣計三千九百廿八人と記しに新城中の死人後九
十余人と聞ぬ次時御目代松平伊豆守信綱戸田左門伝
兵衛寄手人数少しとて肥後熊本筑前福岡両家へ軍勢差
向らるゝ由催促有りて直に松平伊豆守戸田左門伝有
馬浦を指て着船し原の城賊徒の様子を見定て右両国の
軍勢幾向を待ゝ遂に細川肥後守光利其勢二万三千を引
率し正月三日の曉天に門屋を出船して翌四日暮頃に肥
前国洲川浦に着船しぬ其夜野陣して篝を焼て夜を明し
ぬ夫より松倉長門守に替りて大手の先手へ向ハれし
る寺沢兵庫頭も甘草表別儀奥之依て是も有馬浦へ出陣

也筑前福岡黒田右衛門佐忠之當時在江戸なれハ舎弟黒田甲斐守同市正八千餘人を引率し有馬の浦に陣向有り薩州鹿子島島津家ハ島津下野を大将として其勢六千余騎有馬の浦へ押渡る江戸にても有馬の籠城堅固なるを注進に依て九州大名在江戸の諸侯不残御暇下されたれハ皆本国居城に帰り出陣の用意をなせり先ッ細川越中守忠利黒田右衛門佐忠之鍋島信濃守勝茂有馬玄番允豊氏立花飛騨守茂政有馬左衛門佐小笠原一黨水野日向守何も御下知を蒙り夜を日に續き肥前国有馬の浦へ着陣有り大手東口細川忠利其次立花飛騨守其次松倉長門守其次有馬玄番允鍋島信濃守其次小笠原一黨其並ハ有馬左衛門佐其次に寺沢兵庫頭、西濱手ハ黒田

右衛門佐持口向陣格の如し水野日向守ハ遅参に依て陣所の場なきれハ後陣山手に構へさり島津勢ハ肥後陣所のとつき城の北し方濱手に扣へさり衛門代松平伊豆守を始め上使の方々ハ立花松倉両陣の奥少し小高き所岩ハ各々陣を居らる次節惣寄手人数拾二万五千餘人也原の城賊徒の大将甘草四郎太夫時貞謀計を軍中ハ忘めし三千人を三手に分千百人を芦塚忠兵衛布津村代右衛門次両人へ隨ヒ黒田の陣へ押向し甘草を初ハ六百余人を相添て寺沢の手に押向ぬ又千三百人を上総三平千々輪五郎左衛門両人ハ隨ハせ鍋島の手に向へり此両人ハ千分して上総三平ハ五百人を分て火矢焼草を持せ火付の後ハ備へ大せいをあらハむとしめ千々輪五郎左

衛門ハ八百人を付て夜打の手だてを斗りて世大勢手々
ハ焼草を持てそこ爰に火を懸けたれハ忽ち炎と燃へ立
り二万餘人の一揆共一度に鬨を上けたれハ諸将少し動
せに連々ハ人数押出して爰を世ん途と戦ひたれハ夜打
の企いまだ有余人忽ちに討取りぬ鍋島方の兵ハ秀島
四郎左衛門石井九郎右衛門兵両人打死し其外手負八十
余人也甘草玄札ハ六百余人を隨へて寺沢の陣へ押寄仕
寄ハ竹共ハ切破りて本陣へ入らんとせしに先手の
英兵三宅藤兵衛馳付長刀おし取り向ひたれど隨ふ者共
追々懸付我劣らしと戦ひたるに魁の藤兵衛三ヶ所手疵を
負ひぬ其組付の兵ニ浅山源左衛門池田新助松下半三郎
谷崎八左衛門以四人打死其外手負ハ士卒廿四人也

夜打の一揆等三十五人即時ハ打取り三人ハ生捕して嶋
子の恥辱を雪きけ共黒田忠之の持口ハ芦塚忠兵衛布
津村代右衛門千百人を引率し一度にとつと押寄より黒
田家臣の岡田監物鑓引提て出張所を一揆手練の鉄砲ハ
て頭を打られ死しられハ側ハ在合岡田佐左衛門親を討
せて置ぬきうと面を物らはれ打死と思ひ定て突ひ原是
ハ續て小川縫殿ハ仆蓋勘兵衛郎正太夫新見太郎兵衛松
山文太夫是等を始大勢一度ハ突立百余人の一揆共手も
見せに討取鬼討死の者ハ黒田監物其子岡田佐左衛門相
傳ふ者共ハ親見太郎兵衛松山文太夫明石権之丞（是ハ黒田市正家老なり）
是等を始めとして名を得し兵共八人打死し手負廿五人
雑兵共ハ五十余人其夜討取所の一揆共黒田鍋島寺沢ハ

さく首帳に二百五十八生捕廿四人一揆共是ハ恐其後夜打ハ止めて為さりける鍋島信濃守ハ御自代に出れの仕寄を望まれけるハ頼ひ叶ひ其日廿七日午の刻斗ハ仕寄成就しけり自然一揆共打出て乱妨せん時の用心ハ用胃の兵三百余騎所拵ハ裏に隠し置きぬ諸手の軍勢是を見て鍋島ハ諸手に抽て先衆を呼ハと云しめきけり一揆共ハ鍋島の出れハ仕寄を附るを見て其持口の者共数人取寄て石鉄砲を打懸ケ勝成方ハ用意の事なれハ鉄炮を透間なく打ちけ其手ハ進む一揆共を悉く打ちめる時ハ鍋島手の御目附柳原飛彈守の子息岡苗左衛門佐生年十七才弓の者を引連て二丸城の上ハ衆り上り指ハ矢引ハ矢さんくハ射されと矢先ハ進む一揆共少しとゝむ所ハ左兵衛佐と衆切ケ二の丸に馳上り原の城の一番衆柳原左衛門佐と高聲ハ呼ハりけれハ父飛彈守息左衛門を討せしと猶豫なくとつと衆込けれハ後陣の鍋島我も〳〵と衆込ける城中の一揆等去ぬれハ篭城ハ酒さくして殊に兵粮盡ぬるハ敵も見へさりける鍋島勢衆込と直ハふるく火矢を打懸けれハ大手の方より燃出て城中大に騒動を是ハ衆して諸寄手の人数と川と押入りける大手ハ越中守忠利の軍勢三之丸迄即時に衆附鍋島勢ハ二之丸ハ働きしハ一揆共義を最期と戦ける城門口流石ハ破りかねく暫く時を移しけるハ細川勢後に廻り濱手の方ハ打破て一揆の雑人原悉く切捨火花を散し攻けれハ一揆共前後の寄手ハ途を失ひ防

き戰ふかゝなく本丸さして迯入さり細川勢本丸を奪取
くと折り重つて働き必死と成て敵對せし一揆共大石
大木投らけ〳〵手疵を負ふ者數知れされ共新手を入
替々々廿七日の酉の下刻本丸半分東の濱手を奪取て丸
曜の籏を押立ケり又立花左近將監忠茂の先手十時藤三
郎其組付の兵二根村源右衛門寺田角左衛門真先懸て本
丸東の塀を奪取り立花忠茂手の一番乘と呼ハりくれハ
必死と極めし一揆共本丸半分持堅め輙ハ落さりける翌
廿八日曙より諸手一同聲を上黒田寺沢の兩勢本丸に乘
入黒田魁の勇兵黒田美作ハ方になりき廻る寺沢の勇士三
宅藤兵衛援群の働ハ偏易して一揆共を追ふ乱妨る所
ハ細川の手より本丸ハ火矢放打込燒立しハ折節風烈敷

一面ハ炎と成ル故勢心に諸手の勢入替り働きくれハ鉄
鎗の下に伏し或ハ燒死せし者其數を知らに一揆の大將
甘草四郎太夫時貞を細川の臣陣野佐左衛門討取さり一
揆の為ハ是を見るく是を見るく右往左往戰ふ氣色も見へ
悉く亡心くれハ諸勢一同勝鯨波を上け御代萬歳を祝
しくく乱妨又故度の働にて諸勢討死手負を記せしに細川
越中守手勢討死貳百七餘人手負士卒雜兵迚千八百六人
黒田右衛門佐忠之の手二討死二百十三人手負三百四十
七人内二人ハ陣所の口ハて討死同舍孝市正ハ討死十六
人手負百五十六人鍋島信濃守ハ討死百六十人手負六百
八十三人有馬玄番允手二討死七十八人手負百八十五人
立花飛彈守手に討死百廿七人手負九十七人小笠原右京

大夫手に討死廿五人手負二百三人同信濃守手に討死十九人手負百四十八人松倉長門守手に討死廿七人手負三百七十九人松平丹後守手に討死三十一人手負百廿七人水野日向守手に討死百六人手負三百八十二人寺沢兵庫頭手に討死廿三人手負三百十五人有馬左衛門佐手に討死三十四人手負三百八人戸田左衛門佐手に討死四人手負三十四人松平伊豆守手に討死六人手負百余人討死の人数惣計一千百三十六人手負の士卒六千九百五十餘人討死手負都合八千八十六人也戊寅正月朔日より城攻に板倉矢討死其外討死手負三千九百廿八人と前条に記せり

一揆の内に山田右衛門佐と云者寄手方に内通しける事顯る一揆の大将の命令して右の者一族悉く殺さる右衛門佐は大将四郎尋ねる旨有て手加せ足切せを入土牢に下し置る安者も生捕の中に手結足結なるべく引出し直に江戸に召連られ如何きに助命の恩を蒙りしと也一揆の賊徒討捨生捕等都合其数三万七千人と云開の御目代上使を始諸軍勢谷間陣有之也

其後太田備中守　上意を羨り豊前国小倉に到着有り次所に於ける九州の諸侯不残御感状下る寺沢兵庫頭松倉長門守両人に御渡さるゝ趣次度所所に一揆其元始都て国政正しからざる下民怨を起し怒りを發す者也然る上は両人共に切腹御付らるべきの所憐愍に思召を以て松倉長門守儀は所領没収し上美作国へ流罪御付くべき内記に預く置き者也松倉右近事是又讃岐国へ流罪申付

生駒壹岐守へ預ケ置くゝふしなり寺沢兵庫頭事冨岡の城
堅固ニ持一揆共を なやませ追退ケ段補妙ニ思召流罪御
免許ニて領所一圓没収し右働ニ功分を以て新知八万三
千石宛行ハるゝ者也

一寺沢志摩守紀廣高幼名忠二郎ハ武内大臣の後胤紀淑望
の末孫也其孫美濃国ニ住し後尾張国ニ在り廣高の父越
中守廣正織田信長へ仕へ其後廣正廣高父子豊臣家ニ仕
へ文禄四て未年渡多氏旧領を太閤より拝領し唐津ニ城
き寛永二て丑 廣高隠居迫三十一年也嗣君忠高同三丙
寅年ハ正保四丁亥年迄廿二年父子君ニて五十三年目ニ
慶減ス右ハ前書ノ如く肥後国天草郡ニ於テ寛永十五戊
寅領内ニ切支丹一揆蜂起ハ為め右ハ御下知ニ相成忠高
乱病幾し終ニ逝去ス成ル嗣君無之家系断絶ス成ル時
の法ニ當ルも嗚呼天哉

右唐津寺沢家没収ス後御譜代家督代如左

慶安二己丑ハ寛文十二壬子迄廿四年
大久保加賀守 播州

延宝六戊午ハ貞享三丙寅迄九年
松平和泉守 七万三千石

唐津入部無ス後号左近将監出羽山形ニ督代
松平源治郎 六万石

正徳四甲午ハ元文元丙辰迄廿三年
土井大炊頭 円

延享二乙丑ハ宝暦十三癸未迄十九年 紀州右河ニ督代
土井大炊頭 円

延寶元癸丑ハ円立丁巳迄五年 紀州
大久保出羽守 円 佐倉ニ督代

貞享四丁卯ハ元禄三庚午迄四年
松平和泉守 円

元禄四辛未ハ正徳三癸巳迄廿三年
土井周防守 七万石

元文二丁巳ハ延享元甲子迄八年
土井大炊頭 円

48583
0791
15縣
16=4

縣立佐賀
24.11.18
圖書館

5